

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第8号

「ままごと」の新聞」は、
柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が
不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2013年12月1日
発行元：ままごと

「街と演劇」

小豆島の春と夏と秋と

柴 幸男 Yukio Shiba

今年、小豆島で過ごしたあの日々は、劇団にとって、僕にとって、財産となるような経験でした。僕たちはあの島で何をしようとしていたのか、闇雲に動いていたあの日々を振り返ってみようと思います。

春、は何よりもまず居場所をつくらうと必死になっていました。この港に、演劇をする者がいることを知ってもらう。そして、港にその存在を認めてもらう。劇場をつくって閉じこもるのではなく、港全体を劇場にしたいという妄想に向けて、これは避けられない手続きだと考えました。だから、町の中で演劇を生み出す「おさんぼ演劇」なるものをつくり始めました。以前に観劇し、感動した「ボタライブ」(劇作家・岸井大輔による移動式演劇)と呼ばれる趣向を自分なりに、この港でやってみようと思ったのです。

ずっと港を歩いていました。朝から夕方まで。港のことを知っていたかったし、僕のことを港に知ってほしかった。港で聞いたこと、見たことを土台に、物語をつくりました。誰かの現実、創作した物語を植え付ける。その作業は、何か大きな過ちを犯しているような気分になる時もあります。この物語の中で、僕は、港で育ち、港で死にました。この物語を、小豆島出身の町長が気に入ってくれたのは、少しだけ、作品がただの冒険ではないと思えたありがたい出来事



春の柴幸男、蓮沼執太くんを出迎えた写真です



島めぐりライブ出演者の集合写真



紙しばい屋さん営業直前の新菜さん



酒屋のおばさんたちの話を聞く名児耶さん



島めぐりライブ、cafeのテラスにて

なっていると思います。劇団員の端田新菜、そして客演の名児耶ゆりさんを連れての約1カ月の滞在。彼女たちにはお題だけを与えて、模索してもらいつつ自分の劇場をつくってほしいという気持ちでいました。僕が春にした作業を、彼女たちにもやってもらいたかった。そして、彼女たちなら、僕とはまったく違った結果をつくれることができると思います。新菜さんは紙芝居を、名児耶さんはお客さんとの会話から生まれるダンスを、作品にして、港をところせましと移動し上演してくれました。

印象的だったのは、新菜さんが、取り付けてきた営業(?)。どうも自宅で介護しているお婆ちゃんがいるから家に来て上演してほしいという話でした。では居間で静かに上演するかとみんな楽器や紙芝居を持って行ったら、なんとお家の土間にずらりと客席が。近所のおばさま方や、たまたまバスを待っていた観光客まで巻き込んで、僕たちも、もてる技術を駆使して歌、体操、ダンス、紙芝居を上演、最後は全員で「ふるさと」を合唱して、大団円(?)を迎えたのでした。最後の1週間は、こんなことが毎日、彼女たちは、僕の予想以上に、この

港全体を劇場に変えてくれました。

思い出せば秋は、島めぐりライブという移動式ライブから始まりました。簡単に言えばちんどん屋ですが、音楽家たち、たまたま遊びに来ていた友人たちに協力してもらい、港に音楽を振りまき歩きました。このスタートがなければ秋の躍進はなかったと思います。そして、この作品を手掛けたのは僕ではなく、制作の宮永琢生でした。そこが何より良かったと思っています。

小豆島で僕が目標にしていたことが二つありました。島に訪れた劇団員全員が自分の作品をつくること、そして来年以降も小豆島で活動することを、地元の人と、自分たちと、港と、約束すること。その二つの目標は、無事に果たし、今年の小豆島は幕を下ろしました。

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に『ドドミ』で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年『わか星』にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞。同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

瀬戸芸が終わって
唐橋幹隆

from 香川

柴さんに逢ったのは、1年前になります。一人の若者が小豆島で演劇をやるうとしていて、演劇のことは何も知らない私は、地元の坂手で演劇が本当に出来るのだろうかとか不安に思いつつ、その時に話をしてくれただのが坂手の路地裏を歩きながら所々で演劇を見せるというものでした。

瀬戸芸が始まり、お散歩はいつの間にか演劇になっていたので感心と感動をしました。坂手の案内はしていた私たちですが、それが泣けてくる演劇だったのでファンになりました。

最終日前日、私は劇団ままごとを観る機会がありました。介護をする家族や必要としている人たちが、話をしたり歌を歌ったりしているコミュニケーションの場、ままごとLIVEが行われました。

そうめん体操、踊りや歌や、紙芝居など、食い入るように見ている姿や笑顔、涙や名残惜しい顔を見ている私も幸せに思う時間でした。

瀬戸芸が地元にとって良かったなあと思えて、これからもぜひ関わってほしいと再確認した出来事でした。

ままごとの試みを今後も続けてもらい、訪れる人と地域の人たちが顔を合わせ、声を掛けあえる関係から、支え合える関係が築けたらいいのになあと思っています。

この1年間ありがとう。おさんぼ演劇・歌と踊りと紙芝居ありがとう。

今も青いウィンドブレーカーを着た人を見ると、柴さんを探してしまう小豆島のもつしやんでした。

からは、もとかか
瀬戸内国際芸術祭2013小豆島の郷土坂手プロジェクトにて、「ままごと」が活動した坂手地区に住む小豆島町役場職員、瀬戸内国際芸術祭2013の坂手地区担当であり、小豆島町水道課長の顔も持つ。愛称は「もっしやん」。